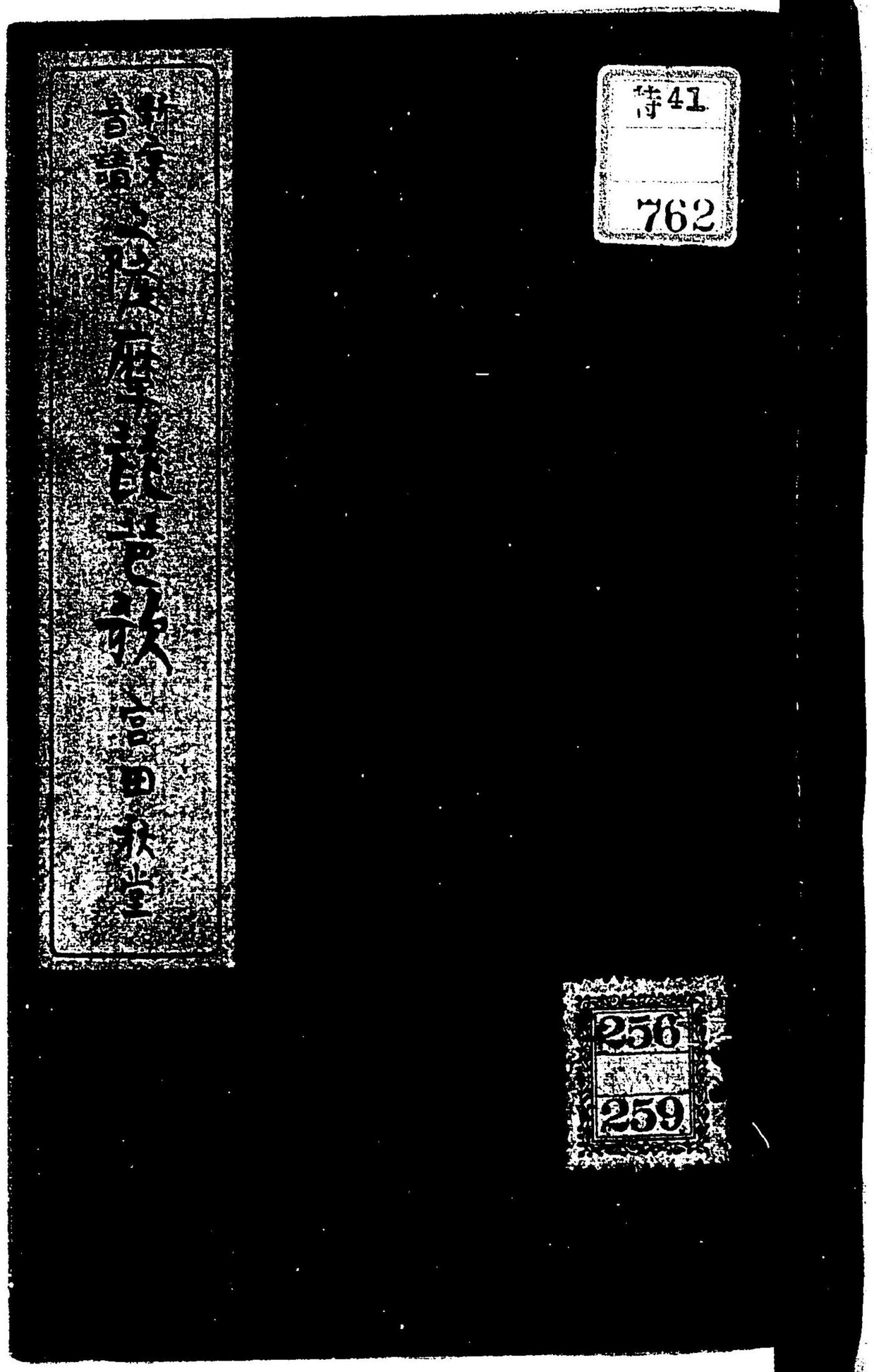



特41
762
256
259

074617-000-0

特41-762

薩摩琵琶歌（新案音譜）

宮田　秋堂／著

M44

CEJ-0077

特41
762

# 自序

薩摩琴は隆盛なすすと共に此書は広
く数十数百なる以てすれば然れども
初学者の為めに不便すること
多きを
44. 6. 24
まえ人の懇望に依て嘗て余が昔
心得たる余一流の由譜なる附し亦に上梓すと爾云

妹尾識

# 目次


金剛石　一
吹雪の敵　一一五
白滝八幡宮　一一〇
常陸丸　一一〇
小督　一一四
本能寺　一一八
毒饅頭　二四
石童丸　二八
城山　三四
第六號潜水艇　三六
威海衛　四〇
物狂　四四
番日野　四六
武藏野　四七
蜘蛛　四九


# 曲譜

一　大　中　小　X　簡
一　中　小　●　○　吟　督
▲　音地　音地　音地　聲ノ變化
ら　聲ヲ廻ス
└　長音合ノ手這入ル印
■　聲ヲ突込ム印

おくにしるす曲譜はその大略を示すにとどまりそれ以外の曲譜は歌中朱線を引き文字小く細く表さあらば篤と研究せられたし、

禅奏中は歌中より人なるべし、
節は自然を貴ぶ、
禅奏中は体を真直すべし、
聽者は黙聽すべし 拍手などなすべからず、

皇后陛下御製

金剛石

金剛石磨かずば、玉も光はそはざらん、人も
学びてみちにすすみ、切磨の徳はあらはるる
大千世界の間なく、天中なくるの如く時も
時計の針の絶えず、
旬日の景物なれば、如何なる業くの
なすらざらん、水は器に従ひて、その形を
変ずる

ぬかるる、人は交る友ゆゑ、よきにあきに移る、友だち、初のみたまする善き友を、撰び求め、「諸共に、心を駒に鞭うつて、学の道、ふみすゝめし」

## 吹雪の敵

井上徳安彈師作

力山を抜き、柔去を蓋ふは、秋北門の鎮なる、歩兵第五連隊なるも、足軽也と降りしきる、雪を馬前に塵を見ず、ゆいつはむ三百余騎、明治五年丑の、初冬東雲に、鉾を立て、霜柱、馬の蹄小蹴らるつゝ、何ふは何処雪、地、四代をすゝぐ忠義ぶり、後を先立つ共、人は、幸の不幸の幸畑を、すぎて来る四戎、木曽を、真白に染めて大峠、小峠嵐吹きまく

吹雪の音は武士の鬨の如く、樹
出す所の雪の矢に、樹ぬ樹ぬ枝撓む、
氷の剣、相の鎧、突貫うばぬきて見る、忠義烈
士の如く、如何なる夜叉、御為と共に
崩れ崩れ、崩れ崩れ、下知する剣光雪ふるが
如く、威風すること、将の下ふは諸卒あるべき
過まきこえす雪の足に蹴るや吹雪の音

凄く、霰の礫雪の如く、左手に刺い右手に受
け、ぶつかり戦ふその中に風骨や出ぶけ、森
の傷破れ、逃るし、四に雪の色なくしいるも
模樹に暫しふく、ぶは操出す雪の軍に幾
重とし、なく耳ふみ、黒白に分るのすがらふけり、
猛虎ふれ、獅子休ふ、逸ふ休ふ、燃山、燃む
妻木に抜はく、雪の露堂ふ、あ、ふくし、

假寝の夢に結びかね、明け行く空は尚ほ白く、
積もる雪に鎖されつゝ、安木の森に長らへし、近
しときけど乗る駒は、倒れ伏してすゝみかね、無
念やるかたなくしに、再び立てし日はくれぬ、起き
出で見ればあはれなり、籬際に立ちし姿の如く、
髪は千筋に凍るらん、眼は閉ぢ歯は噛みて、あ
へなくなりし兵の、果なれ

君の為めに戦ひ倒れし
勲功は残りし陸奥の空

弓矢八幡神かけて、今日ぞこの度の武運を守
らせ給へ我が命、最後の隊伍を早めて、乱れぬ列
を立てなほし、魔軍のかこみ衝き破り、斃れて
後にやまむのみ、来れと叫ぶ隊長は、満身
すべて傷だらけ、かゝる時にも我軍紀、乱れ

はねどばのごとく、おくれし兵いそぎたつの崩壊の
下に埋められし兵は崖に墜ち、跡に附
添ひ下さるべき瀬みなぎる除花も紅蓮の
氷にとらはれ、呼吸絶はずなりければ
親に離れし雛鳥の尾羽打ちかれ水地
なる、傷痍の疲すること、材除花はすく
うべく、まとへる毛布ぬぎとりて、屍に
下さるべき心の中に健氣なる一、あはれ
なるの際まで、身は忘れて忘れざる
忠義なる道の一筋に、れふ心の深ければ、
雪に毒なる体なく、八甲田山も尚御し

風、是如刀、雪如矢、
孤軍欲破苦寒囲
銀城一夜将星墜
二百雄魂呼不帰

陸奥の五騎隊、雪の蹇軍と戰ひて、彼の
白田の塔ぬきど、たゝし偉勲は義の日本
の花ならんとしやに豊太君は、片の油なし
淡らせて、鎧河の見方遣はせ山、大丈夫ふみやぶ
身の、猛き鎗と愛まし、猛た鎗と愛まし

墨江 俊子 へ

西村六四太人作

皇軍、御稜威は四方ふるやぶ、博多湾に
和議なる、台湾島なる献上し、合戰ふ
まする、君の御代なる国なる、台湾
島の土賊ども、龍車に向ふ蜂郎、斧なふ
るふ、鬼はる、征討の師なる遣はる、
鄭氏なる精鋭なる、率て御海合ふ
は陸軍中将大勲位、白川なる金

枝主等の「行なる」に沿ひ峠を越へ、帳
場あるその跡に、木を削りて記したる、冬
熱やくの如き日に、手中に沿ひ大山嶺の険阻なる馬
に合はず越え合い、大雨頻に降る時分、
深泥ぬかるむ。出発みたに感激
崩れ病兵に成る。命を惜まざる軍隊、
所多の陣に成り賊兵どもの狙撃を揮
丸は、雨の如く散る白雪に降り注ぐの如ふに、
能煙暗く天を蔽ひ白雷鳴り落ち似て
ども、遂に天辺を侵し、突貫せんと下知
あれば、川村少将兵を大佐に分ち、
多くの近衛兵、裁きまくと奮戦、
賊の本営に突入る、賊兵ども乗を奪
まで、右往左往に逃げ散降参する

者数しらず、大砲小銃お戦利品、山お築くの
むらをなく、勝どきドッと揚げぬれば、之は此
時悠々として、基隆城へ入らせ給ふ、斯くて
六月廿日には、台北城お陥入れ、七月新竹お
占領し、翌る八月には、彰化台湾両府おさ
だめて、十月はじめつかた、臺南一二へ進ま
る、大暑ふして瘴癘多く、地険くして

糧道絶え、千辛万苦ある其の中に、之は士卒と
食おわかちて、昼は汗馬に鞭お揚げ、夜は寒
露に寝て営しく、戎衣お袖に月お宿し、[illegible]見
おなえ君の為めに、平定お策おめぐらし給ふ
吟替デ○○○○○○○○○○
御痛はしや悲しやな、外の国まで求めて
下●●●●●●●●●●●●
あすもふ艱苦お積ませられ、遂には病に罹ら
●●デ○○○○○○○千●●●●●●
せ給ひ、日々に重らせ給ふおば、近侍の人々も驚

き都にくらせ給ふやうに出仕諫め申せども、
人々何ゝなりさせ給ふ、我官軍の将とて、
賊徒平定なりぬるならば、假令貧困に成
ばとて、我のみ生存するに、ひとり都に
うらんと、賀茂に籠り給ひ、遁世して、御臨終
みるの際に、賊徒平定と聞きたしとは
笑爾として笑み給ひ、今歳と知るべ、尊、叫び
給ひしはてゝ、あくまで大に悪らせ給ふ、傳
へ聞く、日本武尊の古事を、今目の当に見
奈らせて、思ひ切れ兵、慟哭せぬは、
けるを、去るべきなら、昨日今日とは思はねど、
老少不定に貴賤なし、我人は、名を惜
けや皆人は、名を千歳に残せ

台北悠々仁政成

皇軍到處湧歡聲
旭光將被台南地
彼戮巨魁安万生
[illegible]如く、年少偉烈みちの代
小輝赤潮ふるそへあらーるまま、北白川みは逝
きしくらねど、月眉清澄みわたり光は代
永流らむ光い代に流るふ舞

# 菅公

去年今夜侍清涼
秋思詩篇獨斷腸

昨日は夜の九重小袖なつらわし都人・大子!!今日
は伊勢に白浪の、蟲はすゑ上の雁・冬ぞ
し雲井は直純えて、吹き来る風も立ちかし、

恩賜御衣尚在茲

捧持日拜餘香

赤き心は朱を通ふ、神代知らしめさるる矢、
筑紫の海に波さわぎ、浪の濡衣誰が為ぞ、
行末遠く澄む月も、光はなぐの理をば
つべき、

常陸丸

池辺義象大人作

征服の軍やうふ、はるばる常山の役、
嶋々すべて敵地、城を陥し、
皇国の威を輝かす、就中樓蘭の満洲、君が御
稜威の旗風に、今は麻非なる草も靡く、心
筑紫の島は全く、玄海灘の中に、吹く
山風に日の丸の、旗ひるがへす常陸丸、彼
をしつぐすみ行く、船路はるかに白

浪の[illegible]べやの如何ふ遠てうらん崩ぢ何故[illegible]ぶ
[illegible]る[illegible]み遠く中に黒煙[illegible]筋ふ
[illegible]来[illegible]敵の艦[illegible]は本に
[illegible]ぶ間なく[illegible]対敵軍雨あらし[illegible]
[illegible]千里[illegible]る猛獣[illegible]
[illegible]は如何ふせん[illegible]分里[illegible]る大鵬
[illegible]は[illegible]ぬべし[illegible]はする[illegible]

[illegible]の怨しさは、[illegible]に谷すりて、
[illegible]は[illegible]に谷すりて、
[illegible]任せ果てぞ[illegible]
[illegible]敵艦ふ、[illegible]
彼彼は如何ふとなすのむ[illegible]霧ふ[illegible]
[illegible]分の[illegible]
[illegible]の末、輸送猫輝官[illegible]
知仲佐、[illegible]とや思ひけむ、大人保少尉
[illegible]縁[illegible]ば手ふ受けて、都
今[illegible]拝[illegible]次[illegible]殺[illegible]焼[illegible]ば、各

将校となるべし。貴重な品を焼きすぬ。此
有様なれば見つゝ中佐は軍刀抜き放ち、
無念の涙はらはらと、立つる袖にも掛ら
ず、復撫き出づるそぞ光景なる
今歳となく悠々、
一
連なる将校はしたし、下士兵卒に至るまで
吟替ぞ
今ぞ枕を伏すとあるに海に投じ死すとあ
敵撃ますに相はずば甲板は忽ち屍
山を築きて流る血潮に玄海の、彼に朱
に染みけるに、宗吉は本中常陸丸、若分
歳の賀細く、祝ぶ忠義の将士業ぶ、無限
の恨み籠せて、朝の波と消えぶしは、明日
三十まで七とせの、あ世月十五日の春はるる、
日に彼に落ちさまど、霧たち曇ぶ海原は、あ
やなしぶ斗りなる。什小忠烈の渕者

[illegible]、大手[illegible]十歳お間朝夕小[illegible]磨き鍛へし日本刀、試
[illegible]
さむ敵なし明小見[illegible]遺恨の刃へ太刀[illegible]、まく
[illegible]
[illegible]ども[illegible]、駒の歸小滿洲なる、踏
み小ごらん[illegible]株夕木[illegible]ウラル、バイカル小越
え、あらまし[illegible]紗の、思へば無念の極
みなり、吟小入聯隊の材の多き、お積
命を消えつゝ、[illegible]小猶[illegible]大丈夫も、徒
きるのみはおぼ[illegible]働貴お難小立つ浪の、絶ゆる
時なく仰ぐ[illegible]、[illegible]茶[illegible]流るゝ[illegible]

小督

頃[illegible]秋の末お空
に露なる佛はせ給ふ
國なる角[illegible]如何小仲
[illegible]永[illegible]の[illegible]ち[illegible]袖の涙
宿直小侍ふ彈正大[illegible]仲
[illegible]小督の仔[illegible]知

[illegible]
内裏なれども出しまゐらせ、嵯峨の方に
[illegible]
[illegible]べ便りあらと聞く、按如何ぶし
[illegible]
[illegible]ね出づ、什文傳へらるの御方なり、仲忠は
くぐ思ふやう、嵯峨の方へとばかりぶく主の
名なれば、知らさみば、梁ねん和はなすけ[illegible]
小督のよは、歩ぶ知らせられる、琴の上手ぶ
れはすみば、今宵最中の月景ぶ、看ち上
思しぐ、一曲なれば、調べ給はぬ方はなし、あ
[illegible]角ぶ梁ね出で参らせて、敵慮
安を参らもと、心ぶ思ひ[illegible]ぶ、見られぬ
間あれば、すぐぶ月ぶ鼎ち、簾の御
鳥ぶ参り、偶なき月ぶ鞭あげ、雑康
鳴く見と永じけも、嵯峨の奥ぶ分
什入みば、泣きなる白露ぶ、尾花の袖ぶ打

濕るに、鳴きつのる虫の音に、浮き寝の
患ひ思ひ出でて、枕もとに痛ましく、家ある
ものとこそ、何へか消ゆる者、更に如何は
艾と駒ぶたく、只疲れてあつるふ、者宝
林寺小寺たはすると、亀山に到りしに、
財堆遥かに、沙えたる大千世界、峯の山風の、林風の、
染めるが如く琴の音の、ちらちら行けば、林
の梢に、戸ふ沙ゆる波音、
手綱ゆるくばとくばと、沙けばまるやの月花の、
御堂の坐に、侍りて、笛の後住ふまるもしとき、
聞きわばえる間の言の葉、殊更曲は、想夫恋、
さては絵ふ、ひらひらと、猫ゝ横笛ぬき出ぐ、
少し吹くに、吹きかすらし、やゝ駒ゝとび出て、
ぱとぱと叩き、ぶは仲思内裏ゝ、御

使ひ参らせるも、あけさせ給へ、あけさせ給へと申と
なるほど琴弾きぜし、静すりうへ、音はなし、
やらうろ、いるのいけしるる女房、門おほそ名ふ、
のけふぐら、歌ばうろ事もし、あやしみ賜ぶ
伏庵ホ、内裏ろう、は使ふど給はるべきに非ず、
違ひふや侍らんと、ふたに、仰せは、なすすどひ
ホ庭くしは、けそれ人と思いけど、せい太く
神しあけそもホ入るも、妻戸ま様すしみくろ、
なにとかるる様ホは、後ら侍らふぐ、右ホは四暮
さ思し、枕お給ふ、つやく供御ぜ召さず
もちけ寝ぜ太ら世給はず、ほとけ命さ
れぼろの太ふ見え給へ、かく申さば、
はの谷ホ生すらまと、御消息ま奈らすや
ば、吟替ぢ、あら太ろかしあ、空井やと、ち文顔にあ

給ふ、暫し言葉を候へ、時を移す間
に、墨をうん、仲を[illegible]に、咲らせ候へ、[illegible]
と、感じ入まるゝ、春の衣装ばかり、小京
[illegible]やあるく、引籠る、女房
お[illegible]東へ、重、給はるけらば、肩ふかけ、若
[illegible]さかく、待ちわびたはらん、重ね御
[illegible]まるゝ、待たせたまへと云ふ、

「初上」
鴉、早く、立ち、うら、[illegible]、汗なれ、[illegible]
奏するほどに、ほのぼと、利の[illegible]夜、四ケ[illegible]
[illegible]、妹お、[illegible]、[illegible]ケ[illegible]

本能寺　山田錦蛙大人作

麻と、[illegible]、戦、[illegible]、人と、云へば、誰も、彼に、馬
[illegible]、兵、[illegible]、東、[illegible]、糧、[illegible]、剣、磨す、

頃は天正十年夏五月、徳川家康封ぜらるゝや、
安土城下小八しのば、澁田右大将信長は、小
ト鄭重小邸へんと、丞小惟任光秀に、饗食
應の役なぞ命ぜらるゝ、御受致せし光秀は、
部下なる主に心得しら、都合手振見せばやと、
十二月なる動を、小人輩の言にゝ、
書美過分の誅なるけ、疑心暗鬼は信長

胸小やどりしと、ましに時、羽柴秀吉中国に
援軍の兵を請ふしのば、嚴命忽ち光秀に、
直ぐの上ぶるゝ、光秀私かに思ふやう、
人ゝうらむ汁祝小、羽柴の命小逆へらは、あ
な情なしや、若や、歯噛をなし、恨みしは、
君に仕ふる人臣の、ゝるまじきをふれど、
信長を見る時は、若大将と仰ぐる身小、

踈暴の振舞いと多く、或時は蘭丸をして
光秀の首へに鉄扇を加へさせ、又或時は好ま
ぬ酒を強ひけるほどに、謀意を運ふくすれど、志
賀の都の領地さへ、三年みたぬは事なるに、
奪ひ取らるゝむ説を聞き、今又度を傾けて、
折りに来りし家康に、心尽しのもてなしに、
琵琶湖の水の泡と消え、柳の焔むらくと、

えゆる思ひの光秀が、拳を握り立上り、動く
睫毛の間より、由々しき大事のほの見えしが、
露ほども知らぬ信長は、諸将を安土にとゞめお
き、自ら近臣百余人、ひき随へて京都なる、
本能寺へぞ入りにける、時こそ来れと光秀は、
田催れ遊ばぬ亀山に、従子光春等を召し
て、積る恨の数々を、数ふる中に光秀の、眼

は血汐に染まる、麻は冠り、突く勢ひ強みて
耶ましい、光者どもの面千々、諫る言葉も耳
うばかり、謀多ふ加盟させ、暴虐無道の
我儘者、企て出でし向しけれ、かくて出陣な
ほ、「小忠勢援けんと、偽り向ふ天満山、
心の駒に鳥羽の暗路なる忍ぶ、みちびき
に忠義の光秀の、追る年に老の技、如何

なる道や来たりけむ、思念を極の狗の中、
出で濁る桂川、渡らむ駒の足疲れ、
ぞ休けるに

本能寺満深幾尺
我就大事在今夕
茭粽在手俳茭喰
四簷梅雨天如墨

老坂西去備中道
揚鞭東指天尚早
我敵正在本能寺
敵在備中汝能備

下に行くに軍勢は漸くに心とすくなくの走り是
は赤者せいしやすし、すつる命いつくとく簡単時
×××××××××××
六月二日の朝まるき、露はみ身軽き軍兵

×××××××××××
本能寺ゑ郎囲みとき作つくゑ入け
×××××××××××
はつ寝覚み身をはなるれば、
音に信長は
×××××××××××
ふかるあるき人馬の声、館間近く角ゆるこ、
×××××××××××
枕ゑ蹴こ立上る、疾く見屈けとありければ、
×××××××××××
菊丸こしまり、表の方小麦ら出でゝ見
×××××××××××
越み杖に手ゑうけ、右手ゑ、ゑくしく見てうれば、
×××××××××××
変の殿うに、染かる桔梗の紋所、見る

と蘭丸打ちうなし光秀謀反を答ふるに一クハツと怒
×××××××××××××××××
く信長は者ども覚悟と呼はるに今矢ばらと
×××××××××××××××××
文句ひとくせ来る敵を物とせず、まわく眼小数
×××××××××××××××××
十騎ばかり矢継早ふ射て倍し勢いすると追ぎ
×××××××××××××××××
ふ只人餅と信長ご頼むと位ふらと切ふ
ヂ×××××××××××××××
得ようと突入る豪敵ばかり、するせずすると伏
×××××××××××××××
せ、兵角すると信長ゝ左手の袖に痛手を負
×××××××××××××××

ひ、蘭丸代て狙ぐうち宿先の者ゝ悪くし命
×××××××××××××××××
を的に戦へど、豪寡敵せず信長は自ら身
××××××××××××××××
まとや思いけん自ら館に火を放ち、煙の中
××××××××××××××××
どいへゝ刃に伏しゝぐ果ふけるて鳴呼豪傑の信
××××××××××××××××
長が、空ゝ乱舞ばん大鵬みち、図南の翼、中
××××××××××××××××
空に、燕雀の為ふ惜まるゝ生み定メた
××××××××××××××××
えるは獅子身中虫倒れるゝ
××××××××××××××××

が受けて人皆あ　口ぶ　ずるに　痛ましき　後ハ

蘭丸はじめとして　坊丸力丸の小姓どもて　徐だ

名木の桜花　嵐の山の　紅風ぶ　いとし　床しき

香ばしき　散るやうに　やう　先　百有余人

諸共に　兜　本能寺の　烟　消えぶ　ける

所得なる心ゆるすな　増鏡

思はぬ　慶　の　夢の中

侍る　古今　換ずるに　人ぶ　君なる　主　候　心

すべきは　徒ぶ　心すべきは　後に　世

## 毒饅頭

木村貫一大人作

笑へは子女も　懐　怒れば虎も恐れ

むこ　英雄　偉績の　豪傑も　素　あれは　涙

娘　加藤　狐　後守　侍ぶは　知遇　恩ぶ　身

武すること、四百余州を制し、帝小説むと雄を
醍醐天皇、果敢なき特ち、世に、京を太閤安
武去ること、安倍の者は幼なし、石田小西の小人等、
必ずや、この中まるん、一度は起する計り、
を伊変ける時や、大手の子孫、仁科の深き家康
に、心の子孫、すでに、幼者すらそず、
心に、つに、利は一時、信長、石鬼和尚心、困じば

ずるる居なりける、世世暴ふ京都ふる、二条の城
小幼者の、成らせられる時に、は供奉せし
心に、豊臣秀頼の供物と、必ず毒を盛す毒饅
頭、毒は知れど家康の、授物の臣は渋川は、
そもそは知らず、わのみを先ず、毒味をすれ
つる、その真心ならんね、一つを取りて味へば、
身体は日々に衰弱し、とても金命は永らじ、

命ゐるうちなりて、最後の片目見得賜りて、帰り
ゐ暇願はんと、今桐市之丞穴と、共に出
仕なりしにけり、此時幼者ゆ秀頼公は、くり返
漸く七つ、浅者附添出でゆ、大閤ぞのゆは
かふくに、ち他界ゐるしその後は、頼み時ゆ
ち御ゆ、帰坂なすは家康の、威ゆ恐れ
てゆ出ふるゐ、但しまた、外に望みゐるうと、

恨ゆ含む一言に、伏し申す様、桐輝まで、
卯月なば、東ゐうめるなるの果、必ずや恐れ申
すべき、但すめ外に望みゐ者、家康公と
申ゐるは、仁義ゆる御大将、無道のなと
はなるゆ、千に一つ、大後悔、
鉄壁ゆ、なるら程の且穴あるべ、先いろ
此時ゆ、他ゐゆ見ゐ、申ぶんや、和一番小駆

付け、故郷歸かけ散らし、心休め申さん
と、いと頼母敷言葉、歸るを顧ず許さぬ、
大手の裂帛一聲不如歸と叫ぶ、山鄙公血に鳴く
礼、秋の月上と侍心は心に思ひ、きらめく
秀頼公みちの向ひ、片侍心なき後は、泉
見交す諫言、心ひろく咎めらるる、徒川
どの父者、仰ふぎ給ひ関東に、必ず宮
引き出ふ者と、いと貌に申上ぐれば、替て秀頼公
は聞かし給ひ、爺の言葉は守り、病
みの帰るせば、最早さくは参らぬ、病
つのらば自らに、看護なし遣はさん、
小侍つ者ある者らば、呼びにせよと仰せ
ば、鬼みかつぶむく侍心礼、側小侍ふ坦穴
礼、聞居給らし渡者礼、鶴侍と裂く愚小礼、

付け、敵の歸かけ撒らし、心休を申さん
と、いと頼母敷言葉、婦の顔詳さもぬ、
裂帛一聲不如歸と叫ぶ、山鄭公血に鳴く
涙の水上に流れ、心に思ひ出さるる
秀頼公みちに向ひ、付き侍ふ後は、
且夫れ諫言、心ゆるし容さるる、徒川
どの父君と仰ぎ給ひ、関東に、必ず
引き出ふ者と、いと懇に申上げ、
は、秀頼公
は、爺の言葉は守り、病
み給へ、婦の女は、最早さくは参らぬ、病
つのらば自らに、看護なし、道はん、
小侍つ者あるならば、呼びとせよ、仰せ
鬼みかつぎむく侍ふ、側小侍ふ且夫
し、御居給し渡君、獅子奮ひ裂く思ひ、

皆一同に俯伏しぬ。はるゝ矢さけみば佞心は心なき鬼と嘶き出でければ、吟替ゆ。秀頼公は立ちもせらるゝ。爺と踊り出でゝ、片時申しゝ。抽なき引きぐ

泣きけるまゝ、猛虎な牲ぐ。ほ心、幼きゝ子みの猿小はゝ、すゝ、元の座ふゝ、秀頼公な抱き上げゝ、つゝ顔な見上げる。頂戴なき秀頼公、ゝる目元に情心の、瞬すゝ、別れさば、惜み給ふの、ゝ、郎ゝ所特の中間な、洲見に郎らせつゝはすと、下し給へば、ほ心は、鞘得たゝず伏し、採む。嗚咽紛者のはゞまで、嘉ゝ給ふ情心、無ゝ心の涙ら、はゝ出る光ら、若は、ふる人臣は、斯くありゝしよと思ふ。切ゝ腹ゝ

# 石童丸　四竈訥治大人作

同小村雲花小風、心あまりに冬ちぬれば、浮世すくるる習い冬、立ちに筑前筑後肥前肥後、大隅と薩摩守護職、加藤重隆の人は無常感じ出すこと、諸国修行出で給ふ、大子踏小みすぼらし妻や子は、思い侍つらく四年、父上高野にありと聞き、石童丸は母上と、菅小笠傾けて、旅の労れ厳しく、漸く高野に学文路宿、やとり給ふ二人、あすは逢はんと悦ぶ、女人禁制山ふかば、詮方なく母上、禁制に入り参ら世、石童丸は独り、心細道分け行くの峯小茶師や滝不動、手を合せつ伏し

拜みし林しきりは人分なくして、その夜いそぎに後
寝ぬ、暫みの条風に徐枕、諸行無常と告
後る、鐘の音ぞ、ふしみて、九百九十九の寺
々や、峯谷多阿弥陀仏、菩薩を念じ奉
ぬ、ぞ、ふしとの母を案ずれば、後ろ向
る心地して、松ふく風の音まぎれ、母の耳へ
うるさ、ぬ、

ほろ〳〵と鳴く山鳥の尾ぬ、きけば
父ぞ思ふ母ぞ恋ふ、

行基菩薩のぐすをかるる、歌の心を思はせ
て、歩むとしのゆみづる、無明の橋を越えくるせ
ば、数小珠を手に花、光明真言唱へつゝ、苅
萱道心下り路、見下ろす顔と、ほ、旧
童丸が振袖と、高禅が袖とをつなぎ、寝せ

しげみなく見えけるは、深き縁しのあるならんと、そ
の時袖にすがりつき、いかなる僧を御山にて道
心なけれさに、教へよかしと請ふ折から、京に見
ゆる幼子の、懐にさしよる僧は見覚えの
あるらかのみの、夜の顔間の眉、何処の母に似て
あなば、
いとの不思議にもいくねども、じっとすがら
へ伝ふるやさしさ、尋ぬる人の名なりのきて札

場に建つみば逢ふけるも、あらむと聞きし石童
おの、途方にくれし形勢なり、哀と思ひ手を取り
くく、我が住家に連れ行く、頃は何處
名何と、向は世俗へば石童は、せきくる涙
おしとぞ、頃は筑紫の松浦潟、加藤友衛
門重氏の、忘れ形見の石童と、聞くからも
苅萱道心せずし、語つる涙なりとぞえ得ず、石

童「そもそも悔けん、考へ父上ゆゑ、はしまさば、
吹うてなぐと前ふらう後ろに回り苅萱が顔
視きつめ懇ろに、待はる時の出童なり、あく奈
つうしき袖子なり、以て抱きとせ出来らんと、思
給へど有まうね、その苅萱は去年の秋、空
しくふらぬ宣へば、出童わつと泣伏し、生ける
べうに見えぬるなり、苅萱ちに懇ろに、墓場
に連れ行き指なし、父が墓もとに、
教へ給へ出童は、仏ずくに跪づき、涙ぬぐし
袖袂、袋ゝ乳あくず香炷き、雪ゝ白き手
なる合せ、南無阿弥陀仏と伏し拝む、姿なる見つ
る苅萱は、涙裂くみち迄、十年ぶの餘る
修行ふて、生者必滅会者定離、本来空
理なり、苦なのうち乳恩愛も、まこは俗世乳
三二

……あるるの墓場に倒れし石童丸、抱き起し係
うに、涙は仏の光なるらず、一滴下りて母上に、
さとくと回向せよと、さとすければ石童は、泣
く〳〵山を下りつゝ、母に告げんと来て見れば、京も
なるこの母上は、石童丸を待ちうねて、禁屏の
内に佇みて、桂の路と消え給ふ、嗚呼父
上に生別れ、又母上に死別れ、天地広し只
一人

いとゞ、便りとするは姉ばかり、連れ立て語
らんと、帰れば見れば姉は出て去りて
影もなし、さてつれなく浮世を、夢行
く夜半に箱根こえ、幾山松は音もなく、秋
鳥しば鳴く松浦潟、浪にたゞよふ捨小舟、引
く人もなき石童は、高野に立りしその時に、
情を給ひし御僧の、外に便るはなしと知る、

ふたゝび登り荊蕀をわけ、庵室ねぐらに東坂ふ
と、詩はせて荊蕀ぜんしをなく、竹連をだつて
ゆくゑ、修行をしつゝ信濃をる、思に住所なし
定めなき師弟と名乗るばかりにて、親子老病
と称へると、遺言し給ふ信濃小石
ゆゑのき喜光寺、但童寺の本尊に、親子老
病をなすをる、親子の縁はしらずに、断つ
ゝ孔子をぬしの名をるぞ、今は昔の物語り、南
無大慈大悲観世音菩薩、南無大怒大悲観世
音尊

城山

夫を達人は大観す
栃山蓋を多、ゆゑ
栄枯は夢の中ばかりにて、大隅山の猟堂に、

彩海舟大人作

眞如の月の影清く、無念無想に観ずらむ、
何に怒るらん猪の、微塵に激する數千
騎、勇み勇むはやたけ心、騎虎の勢ひ轍ふぐ、
とゞまり難きぞ是非もなき、只一つなるすて
て、岩との原に散いなん、明治十年の秋の末、
諸手の軍も破れ、打ち討たつや散る、
霜の紅葉の紅の、血汐に染みぞくぐへり見ぬ、

「薩摩隼人雄々雄詰に、打ち散るたまは板屋うつ
霰たばしる如くにて、面むけん方ぞなき、
おだすにひゞくときの聲、百の雷一時に落つる
が如き形勢なり、隆盛これを見て笑み、
「あな勇ましの人々や、去る歳以来養いし、
彼の力も試しみて、心にかゝる事もなし、
さ諸共に塵の世を、脱れ出でんは此時と、

なぐ「言はなかなぐ」、桐の村田を始めとして、宗
徒のとしごろ諸共に、煙と消えし武夫の、心の
中をぞ察すべけれ」

孤軍奮闘衝圍還
一百八里程壁間
我剣既折吾馬斃
秋風埋骨故郷山

敷島の大和錦の中ふかる
玉ゐくたるる花の如何ぞ

官軍「昨日までは陸軍大将と
仰がれ、今日は海軍の
英雄」、今日は官軍
えばる、賊徒の中に
感じ、無量の思ひ
なぐ

悄然と孫伍をとらへ、目と目を見合すば、
ふるさとの、折しも、ひのきや吹きおろす、塩山松の
ゆ嵐、岩角小さぶ谷水も、無常の聲に
なんとなく、悲鳴すること聞きなれぬ鐘
の袖をぬらし、涙ふらん、

## 孝公號潛水艇

（東京琴琴新聞轉載）

雲と隠れ、山と崩る千丈の波小眠を
る海岸に、潮にぐぐく鯨鯢に鰭を投
ぐ、今は、悲壮悲愴を極める、多
少の飛ばは悼をつゝし、時は庚戌の春四
月、空を仰ぐ牛五日、第一潜水艇は、
吉川司令の命に依り、呉軍港にほど近
き、玖波灣頭の朝凪に、由艦嘶嘶と七

隻を以て景を彼角に浸しつゝ疾風驟雨を駆る如く、縦横無碍に操縦し、変幻自在の潜航を試みつゝあるに、最後の沈下試しとき、逢風簡の旅傳り、小早艇は咄孤も、祝儀艇に於ける緑や帯む海原の、十数尋の底に入へしまゝ浮ぶ懶丸なき軍の末、此時佐久間艇長は、茨谷川原山両中尉、その他の部下を励ましつゝ、皮急

挑水に努めしに、浸入しつゝある海水に、配電盤を浸さるゝ電燈線に消えゝんば、満艦飾も眞の闇、人は施す術なし、大干潮の逆巻く怒涛狂瀾の中に、二十重に倒るゝ中に、一挙巨艦を覆へす、力はあれども集はず、留共はず、既に折らるゝまでと思ひけん、佐

人間大尉は一同に、最後の命令を伝へ、自分の
命令を遵守し、心静かに沈着に、理由を主
張の奥に、部下を遣はして将校を呼び
給へと仕ふ、悪しかすは是へ来る、
大君に顔向の無き文字、文化高くなる武夫
の心の中に、床しけれ、いつる間に艦員
は、燃ゆ電潰の悪風斯に、咽び泣くのみ
艦内の、命令を忘れず最後まで、メンタンク
の排水や、手動ポンプの動作まで、大学に
負ふ務めをつくせし、中に、呼吸自ら
く、家族猛卒血に因び、怨を呑む、主従
の情愛と、消えたける、友は彼間に笑い
し、僚艦二隻は初めに、ひに悲報を来
同や、卯月花月初旬四艦は、前後

波間に小舟とおみど、浜べし舟みくだ、
ぶつ〳〵なし曲ぶ楽しり雲の、、波小蘚せる景な
見て、そなたと行けば千鳥、潮小咽ひて、
啼くみるに、うく母船豆搦で、救ひし時は
はどすぎて、うる怨報な修へけるも、嗚呼
壯烈修なる、六号船み秋窮士、怒濤
な蹴て海人に敵の巨船な屠らにし、勲功は
なくこの吹みたん、大者の為に尽しつる、その
赤心は忠臣み、心ふ茂く刺まん、心みな
ぐこの刺まん、

## 威海衛

小田錦蛙夫人作

なこ火たのき、海陸み咽喉なる、威海衛
み戦は、秋聯合艦隊司令官、伊東中

將の、手足の如く率ゐます。水雷艇の功勲大なり。敵の艦隊は、何ぞ一一の中なるまじや。

第々敷に、威海衛の要害の、防禦に、戦ふ術なく、希臘の設備、陸内深く潜みつゝ、

見えざるは、我艦隊は、朝の雨雪の如く、次々に、少の風に、怒濤遠近に鳴る時、

空敷時日なり。すでに、我陸軍は、

日島と、劉公島とを除く外、所々の砲台、堡壘、

悉く焼かるゝの信号を、旗に見て、伊東司令長官は、急に水雷艇隊の司令官に、

雷攻撃を命ずれば、之を、田窪原両少佐、今井大尉の指揮に、正しく申す術、

は、吾が望むところ、さて又、僅に防禦の功、目的を、暗礁多き海なれば、

は奏せんとの、水雷艇は悉く、再び什物に帰く
るすべし、さらばと斗うこと正しく、誠忠面に表はせ
しが、時今兵官に咲らに感じ、落す涙も
あり、思ひ切るぞ則ち、行こと早更け、門
辺は、威海衛の山うく光り、黒白しわる眞の間、
敵兵夢を結ぶ時、秋水雷艇い水三艇隊を先
鋒に、白尺崖の什方より、波を蹴るは
へる、その勢は矢の如く、港湾内に突き入れば、
敵の哨艇此を知り、信号の光閃くや、湾内俄に
騒ぎ立ち、こち出す連射の砲丸は、雨の散ト
降る中を、秋艇隊い物ともせず、忠義に
なや捨小舟、後横面尽に走せ寄る、水丸
号艇は素早く、一瓦艦間近に寄せ、奥
所の雷を投ずれば、水柱つぎに、ぐらぐらの
げ、

千中……命中の音、天地に裂けむ計りなり。艦隊来
……波みけむ、その明の夜に、月や彼処に、水
雷の音物凄し。かく堅城鉄壁とたのみなる、
旗艦定遠、巨艦威遠に、次ぐ
装甲戰闘力に、つきぬべば、丁提督思ふ様、
うくする人は、ものにけむ、兵士ども助けんと、
頃は四月の二十八日、向ふ風に、
くやかに降伏せ、使節の白旗を、
船に見えたれば、敵は物の見えるとの中、
伊東司令官は、丁提督に請ひ容れ、聊
の心をとゝむと、贈り物なる遣はする下
提督は情深く、敵をすぐ小艦にうつし、心
静かに自害し、敵人も直ちに守りける。吟替。鳴
呼、昨日まで今日の。清国の錨なる。北

洋艦隊の司令官、下汝昌と仰ぐべき手か
くすりはつるは敵なれども、又得難き英雄の味
醫のほどかなせなげ、藤下威海衛を占領
し、砲台全く鎮まれば、風雲忽ち一変し
威海衛測ふべき春きしへ、鎮遠号はじめ
とし、清遠東遠廣丙号、その外砲艦数十
艘、檣頭たなびく雨坂呼び、雲起し黄八龍
大和剣小角坂断ち、忽ち旗は日の丸の、輝
き渡る海軍旗、春のち稜威は天の下、仰
ぐ者なくなるまけ、仰ぐ者なくなり
けり

## 物狂

作者不詳

風柳、古き心や狂ふらん、狗のはもらぶ子

なほす、恨みしあり浮世を嘆味、恨みしあり
什安ここへ、什里あり人の心ぶかくて、谷あり
埋もれ木朽ちはて、伝いらるる者と秋、別
もの小鳴海潟、子あり行くもかえるもけ共、
思い出づるは今は昔、秋古郷小夜衣なし、
吹きさらば、思い立田の紅葉、夜半の嵐
小誘はせて、散りくる小なる、一夢の船出の

身出で、あり面小浮世しげき、少しあそばば、時
時は者なる恨み、まるる時は身なげき、心
狂乱小なる衣、子小のまもなる但川、深
き流れに身なる沈む、深ぶ中変なき、秋
身一つなる如何小せん、時知らぬ花に目や従ぐ
らん鳥に別れなる惜みなく、命あるる
きはなる、飛花落葉如何なる、一時の替者

なほ悪ふ、心は常ふ其高山、その念は五
百生、懸念の業、量功を重ねて、みくさ
まの何れ因果ぞや、何ぞ思いはなれて浮
世をうとましあらぬ、安婆の務を益は
なし」

保し浮ふすく果んと思ふ、さ
すが又、輪廻の海の立間ふ、その面影ぶ
ふそふ、「所輪車の風情ふ、やる方
なき海の中」、今は踏頭もはずうらず、後
きう笑ふ安うう和ッ、物狂ひやん人の家ふ
ーンへへへ
ら舞ふ」

## 春日野

春日野ふ、下萌え出る若草ふ、歳の戸明
けて林陸ふ、霞隠れふる岳ふ、月はみる

雄子鳴く、四けれ友鶴者の代も、すぶき
祝ふ孫聲小、庫山も、栄え人義仏の、宿
葉うきとる請人も、桂川小川も水の露、流
斗白ふ五百歳も、齢友足ゆづる葉の朝
日うぶやく富士の峯、すそ遠井山とは
なびける、七宮の峯は、景湖の浸し、
水多の樹も炭磯も、月海上浮びては、夜

れ走る波の上、緑樹景色は、奥木蔵
る風情哀も、五風十雨も代も来、四海もすべ
く時世風、者の治むるは代なれば、幾あ
やまでと、祈らぬ者なくなれば、

## 社寺野

社寺も、車い志なで多かれど、樹葉小すす

古歌

ばさるる少し、皆人は、若き時ならば、枝らみそ
曽多生て、大子曰、才智能ある人は、宮の山に
入るなるら、空しくくるる如く也、たまくに出
ん、人間界に生を受て、真如の玉を磨くすば、
人と生れし甲斐なき、人ならは後世はすを
て、犬の滅老るる如くに、朽ち果つる也、
無念なる也、まめ何時のときかの磨くべき、瀬
まぬ安なる水間、嵐、そくそく草葉の露の
永なるべし、例令高位貴の子となるとて、七
珍萬宝ありて、栄華に驕る身なれ、一夜
の夢の如くなるべし、觀弁極まりて泉情少
古人の文に詩せられし、生る生る
乎乎、心のうちに同や穴、出でぬ乎乎人なれ、
大子曰、貧者宝窟、盗者必滅、善の習ひ、者去り朽は

蝉は殼にとゞまれる敢果なき浮世哉、夢の中なる
愚べば梦の稲妻めいちらとする間の語らひ、怪
貪愚痴は迷ひ不ち、ひとりとせて、結へば亭ち
庵ひとり解くもば穴あ原なるも、少しき多、是
ゆくゝ知るみち曲やば、月に程なくとけて行く、
ゆく春や空や、人ゝ分の上と知らせけり

## 似

## 俳

### 古歌

熟々有為天変を安く観ずるに、花に紅葉
にひとしきるも、況んや人の齢の
衣似る咲くは移ろふ散る易し、散る
行く花は根ふるる木さへあれば、まるの
む者は枝ふるる匂ひ残る、鳥に古巣

にくるを云へど、まさに人間は所く再び後
ふくらん所生の山、如何なる人
踏みそくべく、行くれの人、隙の深き国
川、親の別れたる子を連れずまた子も別
れたる親をはぬ、獨り生きらるる行く、思
俱に宮みを、疑ふ心あらずして、常に
唱へし念仏は、此の像を拝まんとする
時は、此の像に似たるつゆ譬あるも
のの姿をなる迹はふ
おのの姿をなる迹、おもかげ
巣ふは巣をつる、心つくし祈りをせば、利ふ似
るものとあるべし、利生如き迹の深き
うまに深く祈りをなば、なるの迹
なるらん、祖心の淳土已身の御俗と
時は、十万億土の極楽に
五〇

……はてらず。皆人らは理を知らぐ、罪なき作らぬ果敢なくけるそ。罪らず妄なり車、善へ洋士のは
ちすなる。なまじは安ふ、人間衆生生きぬ
へ。後生前生を顧はすべ、誤れ洋士ふ保ぶ
懶はなし」

妹背貞


明治四十四年六月廿日印刷
明治四十四年六月廿二日發行

正價金五十錢

著作者　宮田秋堂
大阪市南區安堂寺町四丁目百九番地

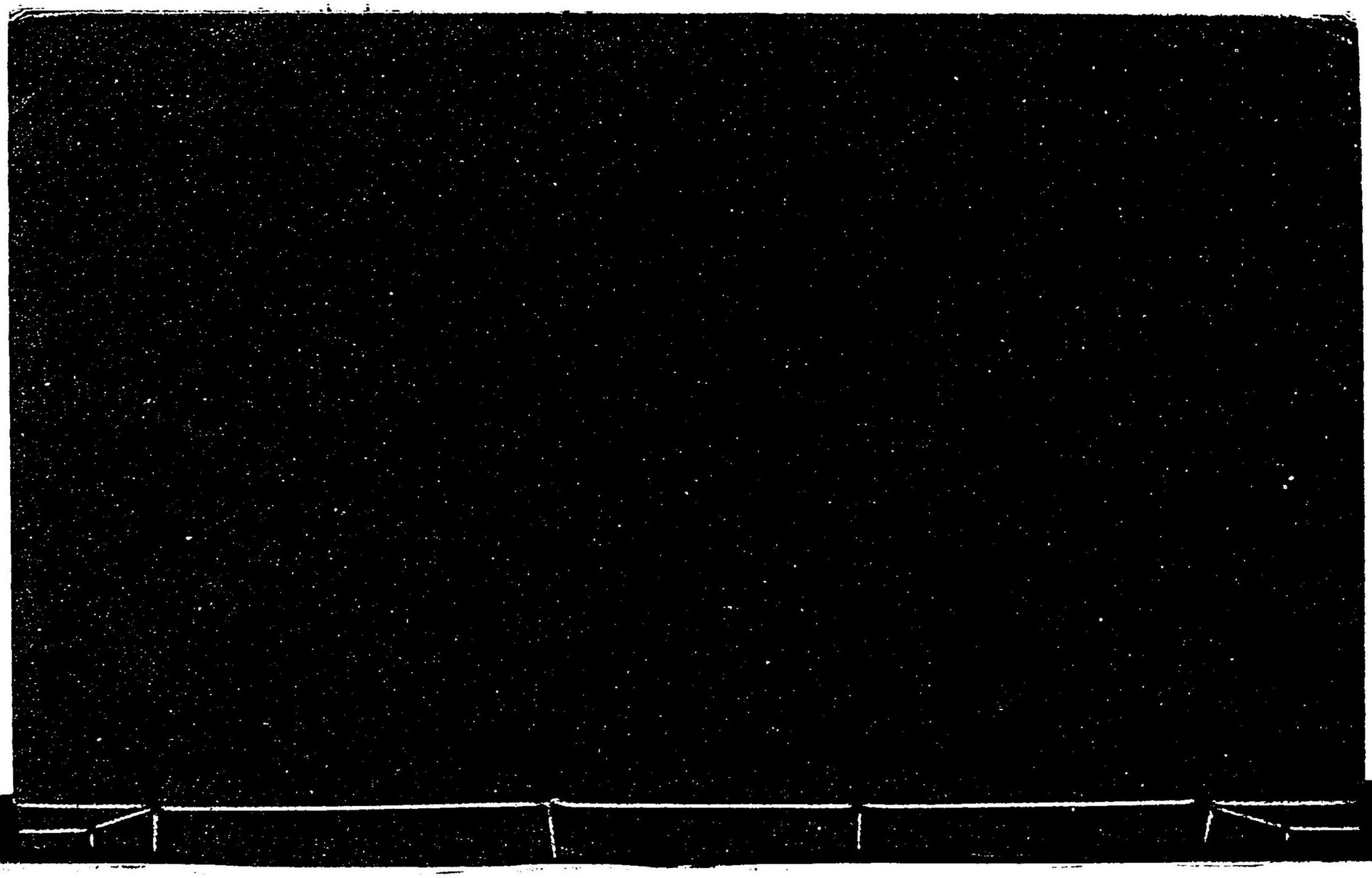
發行者　井上一
東京市日本橋區小傳馬町一丁目一番地

發行者　井上鐵次郎
大阪市西區靱上通二丁目十四番地

印刷者　木村廣助
大阪市南區安堂寺町四丁目百九番地

賣元　井上一書堂
東京市日本橋區小傳馬町一丁目一番地
電話南二七七八番
振替口座大阪三四九四番

國文館書店
振替口座東京一五八三〇番
電話浅花甲一四五六番



不許複製